



星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2014年12月27日

賢治、大地へ (1)～(7)

(1)

教師時代、賢治は生徒と触れあう中から、多くのものを得ていくと同時に、最も自分を慕い、日蓮宗にも理解を示してくれた妹トシの死、そしてそこから鎮魂と共に自らの魂の癒やしを求めた樺太への旅と、多くの経験をしてきた。その経験は、いくつかの作品の中、後の名作「銀河鉄道の夜」の断片に昇華していくが、一方、賢治自身がこのままでよいのか、という思いにさいなまれるようになっていく。そんな思いが表に出だすのは、1924年（大正14年）のことである。この年になると、賢治は近い人に「教師を辞めようと思っている」という発言をするようになる。そして、真剣に農業に向き合おうとする。

1925年4月13日付けで元農学校の卒業生で、樺太の会社に就職させた杉山芳松氏にあてた手紙が残っている。その一節に、賢治の思いがにじみ出ている。

「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから多分は来春はやめてもう本統の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創ったりしたいと思ふのです。（後略）」

もちろん、賢治は教師として農業を教えてきた。そして、農家の息子たちが、農業について学び、卒業していく姿を見送っていた。それなのに自分の役割が納得できなかったのだろうか。その心境の変化はどこから生まれたのだろうか。賢治研究者の菅原は、下記のように分析している。

「宗教的な生き方を求めていた賢治にとって、農業はむしろひどく遠いものであった。しかし今、

現実として農家の子息に教えることで農業が身近なものになっていったのだ。」（菅原千恵子著「宮沢賢治の青春」角川文庫）

そして、農家の子息たちも何人かは学費が払えず、退学して行かざるを得ない状況も賢治に追い打ちをかけたといえるだろう。自らが農業に従事しなくては。そんな思いが強くなっていったのではないだろうか。安定した教師という職を捨てることは、当時としては並大抵の決心ではない。だが、もともと自ら強く希望した職ではなかったし、そしてあの人生を共にしようとしたほどの心の友であった保阪嘉内も故郷・山梨で農業に従事することになったことも少なからず影響したのだろう。

一方で、大地への思いを固めつつある頃、賢治の文学にとっても極めて重要な出会いがあった。

(2)

あるとき、姫路に用事があって宿泊したことがある。その時、姫路文学館で「宮沢賢治・詩と絵の宇宙 一雨二モマケズの心一」という特別展があることをローカルな新聞で知った。ホテルをチェックアウト後、迷わずタクシーで向かった。文学館はなかなか立派な建物で、展示の目玉である「雨二モマケズ手帳」や、「春と修羅」「注文の多い料理店」の初版本、そして水彩画「日輪と山」なども、落ち着いた雰囲気の中でじっくりと眺めることができた。

もとより、こうした作品は賢治記念館でも見ているが、今回、私にとって興味を引いたのは、ある人にあてた賢治の手紙である。それは賢治が教師を辞める前年の1925年のもので、前回に紹介したように、賢治が教師を辞める決心をしつつある頃に書かれたものだ。手紙の宛先は詩人の草野心平。後世、賢治の作品を世に送り出すのに大きな貢献をした人物の一人である。

ご存じの方も多いと思うが、草野心平は日本を代表する詩人の一人で、賢治と同じ東北・福島県生まれである。中国の大学で学んでいたが、帰国後、雑誌「銅鑼」を主宰し、賢治に作品発表の舞台を提供し、その後も中原中也らと活動を共にするなど、職は転々としながらも、詩の世界で活躍を続けた。生涯を通して、自然をテーマにした詩が多く、特に蛙や富士山はよくモチーフにし、特に文末に句点を用いる独特なスタイルが有名である。自然、特に山や宇宙について詩に取り上げるところから推察すると、賢治と共通した感性を持っていたといっていよいだろう。「天」を多く使っていることは、心平自身もあまり自覚がなかったようで、詩集「天」のあとがきで、心平は

「私がいままで書いた作品の約七十パーセントに天が出てくる。或ひは空とか星雲とか天体の様々な現象が。」

と驚いているほどだ。「天」の収録作品の一つ「夜の天」の一部を紹介してみたい。

「天は
螺鈿の青ガラス
しらくもの川。金平糖の星星は。
虹のやうないくつもの層をくぐれば。
(後略)」

この4行だけでも、賢治の世界観と極めて近いことがわかるに違いない。

1926年には「詩神」掲載の評論の中で、心平は「現在の日本詩壇に天才があるとしたなら、私はその名誉ある「天才」は宮沢賢治だと言ひたい。世界の一流詩人に伍しても彼は断然異常な光りを放つてゐる」と褒め称えている。実際、賢治の作品が世に認められるようになったのも、後の心平の尽力が大きい。

実際に二人は会うことはなかったが、お互いを認め合い、時には経済的な援助も求め合う仲になっていった（心平はどうも賢治が裕福だと思っていた節がある）。そして、賢治が心平の主宰する「銅鑼」に連載を始めたのは、教師を辞める決心をした頃と重なる。姫路で展示されていた心平に宛てた手紙の中で、賢治は「自分をサイエンティストとして認めて欲しい」趣旨のことを書いている。教師以外の道を模索し、自らのアイデンティティを探し求めていた賢治の思いが垣間見えるようだ。

(3)

草野心平との出会いは、教師を辞めようとしていた賢治に幾ばくかの影響を与えたことは間違いないだろう。辻潤と同様に、「春と修羅」に草野心平も大いに感激し、主宰する同人誌「銅鑼」への寄稿を懇願したからである。

なにしろ、文壇からはほとんど評価されなかった賢治である。そこへその価値を認め、同人の誘いが来れば、こんなに嬉しいことはないだろう。もともと世界観の似た二人の交流は、その後、長く続くことになる。そして、賢治は教師をやめるまでに「命令」「未来圏からの影」「休息」「丘陵地」「秋と負債」「昇幕銀盤」などの詩を次々と「銅鑼」に発表した。これらの作品は、基本的には、それまで書きためた「春と修羅（第二集）」の中から、適切なものを選んで寄稿したもののだが、原型よりも概して短くなっている。これも心平の詩に合わせたのかもしれない。

そして、中には星や宇宙が現われるものも含まれる。例えば「命令」は、軍人の命令を扱い、夜の行軍を命令する様子が描かれたものだが、

「おい、マイナス第一中隊は
午前一時に露营地を出発し
現在の松並木を南方に前進して
向ふの あの そら
あの黒い特立樹の尖端から
右方指二本の緑の星の東にあたる
小さな泉地を経過して
市街の
コロイダーレな照明を襲撃せよ
（後略）」

とあり、小隊長に「きさまは空のねむけを噛みながら行け」というフレーズも発している。午前1時を過ぎ、丑三つ時あたりになれば、それは眠くなるのは当然だろう。それが空のねむけと表現した上で、それを敢えて「噛みながら」としているあたりが賢治らしい表現である。

また、「秋と負債」には、後の賢治の童話作品「ポランの広場」というタイトルそのものの表現も現われている。この作品は教師をやめる直前、1926年1月号に発表されているが、おそらく童話の「ポランの広場」の構想は、すでに教師時代に培っていたのだろう。

いずれにしても、賢治はこうした寄稿を通じて、心平と交流しつつ、一方で自分自身について思い悩む側面も垣間見える。彼が心平に送った手紙には、

「私は詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとしては認めていただきたいと思
います」

とあるからだ。この言葉に込められた賢治の心境は、果たしてどのようなものだったのだろうか。

(4)

「私は詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとしては認めていただきたいと思います」

草野心平への手紙に綴られた賢治の言葉。それは文壇で認められることなく、作品が売れることもなく、また教師生活にも疑問を持ちつつあった賢治の真情を吐露したものに他ならなかった。

ちょうど草野心平の同人になった頃のこと。東北帝国大学理科大学（※）地質学教室の早坂一郎氏を北上川に案内することとなった。1925年の秋のことである。もともと賢治は「石っこ賢さん」とあだ名がつけられるほどの理科少年であったことは前にも紹介した。その後、盛岡高等農林へ進み、同級生と共に進級のための論文を書くことになるが、ここで恩師の関豊太郎教授に指導されることとなる。関といえば、日本土壌肥料学会の初代会長となる人物で、土壌学の第一人者だ。そんな人物に指導をされたわけだから、賢治の地質学や土壌学の知識は半端なものではなかったはずだ。実際、盛岡付近の地質調査を行って、詳細な報告書を仕上げている。教師になってからも、自ら生徒を連れて、現在で言う「地質巡検」にでかけていた。そんな賢治を頼って、早坂博士がやってきたわけだから、賢治もまんざらではなかっただろう。そうして、賢治がイギリス海岸と名付けた北上川の川岸で、昔の胡桃の化石を採集した。この胡桃の化石採集の研究成果は、地質学の学術雑誌『地学雑誌』に「岩手縣花巻産化石胡桃に就いて」（大正15年2月発行 地学雑誌444号、55p）という論文に結実しており、早坂博士は謝辞で、「化石採集に便宜を與へてくださった盛岡の鳥羽源蔵氏、花巻の宮澤賢治氏に感謝の意を表す（大正十四年十二月二十二日）」と述べている。ちなみに、「銀河鉄道の夜」でプリシオン海岸での胡桃の化石を発掘しているのは、早坂博士がそのモデルである。

採集された胡桃は、110万年ほど前に絶滅したオオバタグルミであり、現在のような小型のオニグルミへ進化していく前の段階の種である。この発見は貴重なもので、その先駆者として賢治の功績は大きい。早坂博士は賢治に論文の共著者になって欲しいと頼んだと言われているが、賢治は固辞したという。

しかし、その一方で誇らしい、あるいはもしかしたら、こうした科学への貢献が続けられるのではないかという気持ちもあって当然だったのではないだろうか。根っからの地質・鉱物好きの賢治。

「サイエンティスト」として認めて欲しい、という草野心平への一文は、早坂博士を案内しての胡桃の化石採集の時期とも一致する。このことから、賢治の心情が大きく揺らいでいたことを示すものに他ならない。

その気持ちの揺らぎは収まらぬまま、賢治は、ついに教師を辞める。1926年3月、賢治30歳の時である。

※発足当時の東北帝国大学は、農科大学（以前は札幌農学校）と理科大学とで構成されていた。

(5)

賢治は、ついに教師を辞め、大地に根を張る農民になる決意をする。1926年3月、賢治30歳の時である。

教師時代を通じて、彼の気持ちは様々な方向に大きく揺らいでいたといえるだろう。かつて紹介したように、もともと自身が望んだ仕事ではなかった。しかし、教師を始めて、賢治は生徒と向き合う中で、多くの作品を生み出していくと同時に、生徒たちにも作品を紹介し、歌、舞台や演劇などを通

じて、自らの思いが伝わっていくことに喜びも感じていたはずである。その4年余りの年月は、創作者としての賢治をむしろ充実させていたはずである。その証拠が、この時代に多くの作品群が生み出されたことに象徴されるだろう。

では、彼が教師という職業に対して、気持ちが揺らいでいくことになる原因は何だったのだろうか。それは単純ではないようだ。中央の文壇には認められない、ということもあって、自らの詩人としての自信のなさもあっただろう。そして前回紹介したようにサイエンスへの思いもあったかもしれない。しかし、一番大きかったのは、当時の農村の状況を背景に、自ら教えていた生徒たちへの願いと、自分自身の生き方そのものが揺らぎはじめていたことだろう。なにしろ、当時の農学校の卒業生は半分も農業従事者にならなかったという。それだけ農業をとりまく環境は厳しかった。そんな中で、賢治は生徒たちに農業を基本とする生活を目指せと言いながら、自らは俸給をもらう教師という職にとどまっているという矛盾に耐えられなくなったのだ。これに関してはいくつかの証言が残されている。農学校の教え子であった富手一氏は、次のように述べている。

「先生はわたしたちにいつもいっていました。学校を出たら家へ帰って百姓をやれ。なんどもなんどもいわれたのです。ところが学校をでるとたいていは技手になったり役所へつとめてしまう。それでは農村は立ち直れない、よくなると先生は思われていたのです。そういう自分が俸給生活者である矛盾から、おれも百姓になるからおまえらもなってくれ、という強い態度が示されたのだと思います。（堀尾青史「年譜宮沢賢治伝」より）

自ら抱える生き方の矛盾に悩み、決断したのだ。

ところで、この賢治の決断を後押しする理由が、もうひとつあった。あの保阪嘉内の影響である。

(6)

賢治が教師を辞め、農業に専念しながら生きる決意をした背景には、友人・保阪嘉内の影があったことは確かだろう。

このコラムでも、「星からの視線を感じた賢治の心（5）（6）」で紹介したが、保阪嘉内は、盛岡高等農林学校での同級生として賢治が大きな影響を受けた人物である。宗教を通じて皆のために生きるという崇高な目的を共有し、「同じ道を歩もう」と約束をしたはずだった友人であった。しかし、除名放校処分を受けて、郷里の山梨に帰ってからの嘉内は、地元で生活する中で、自分の生き方や社会に対する見方が変わっていった。宗教者として生きていこうと、家出同然で上京した賢治に乞われた時には、すでに賢治とは違った生き方をする決意ができていた。その本心を聞いたことが、賢治をして郷里に帰る決心をさせたと言っても過言ではない。

もともと保阪も農民のために生きる決意は賢治と同じだった。ただ、それは宗教からではなく、自ら農業に携わりながら、農村を開拓していくことを選んだ。

農林学校時代にも、すでに「農学を修めて故郷に帰ったなら村長になって土地を改良するとともに農村に副業を興し、多角経営、共同組合的組織を取り入れて模範農村を築くことを考えていた。」

（菅原千恵子著「宮沢賢治の青春 “ただ一人の友”保阪嘉内をめぐる」より） さらにいえば嘉内は農民文化を築くことが大切と考え、「農民芸術論」などの演説を行っている。実際、嘉内は、一時期新聞社に勤めた後、郷里で農民としての歩みをはじめていた。そのことが嘉内から手紙で知らされたのは、賢治が実際に教師を辞める前年の5月のことらしい。

その手紙に対する返信には、

「お手紙ありがとうございました。来春はわたくしも教師をやめて本統の百姓になって働きます（後略）」

とある。その後も手紙でしばしば交流を続けていた賢治にとっては、嘉内が常に一歩先を行っている意識せざるを得なかったのではないだろうか。その意味でも、一度は決別した友であったとしても、嘉内の影は常に賢治の中にあった。

そして、その影をいつのまにか追いかけて、自分もかつて嘉内に聞かされたような、大地に根を張る生活へとむかっていったのだ。

(7)

1926年（大正15年）、3月末で学校を依願退職した宮澤賢治は、花巻町下根子桜に住み始めた。ここは祖父である宮澤喜助が北上川の河岸段丘となっている高台に桁葎二階建ての宮澤家の別宅として建てたものである。桜という集落の端にあり、東側に北上川を見下ろす眺望が優れた場所で、段丘を川へと下った降りたところに畑があった。これが後の「下ノ畑」（※1）である。

この別宅はかつて妹トシが病に倒れて滞在したところでもあったが、誰も続けて住んでいなかったこともあり、かなり傷んでいたといわれる。賢治は入居の数ヶ月前から、それなりに大工を頼み、補修したようだ。特に一階の六畳間は、皆が集えるように改造して、5月には早くもレコード・コンサートや子どもたちへの読み聞かせなどを始めた。ここで銅鑼（※2）へ掲載する詩作を行いながら、独居生活に入ったのである。

さすがに地元でも先生の退職はニュースとなった。岩手日報には「新しい農村の建設に努力する花巻農学校を辞した宮澤先生」という談話が掲載された。そこには「農村経済の勉強と工作をし生活即ち芸術の生きがいを送りたい」という賢治の決意の一端も紹介されている。

まさに、彼の理想を追求しつつ、ついに8月23日、賢治は「羅須地人協会」の設立を宣言し、農家の青年たちに声をかけ、農業や農民芸術などの講義や、肥料の相談をはじめとする活動を開始する。その活動は半年以上にわたって続くことになる。ただ、特に芸術に関しての活動は、保守的な農村にはなかなか受け入れられず、出入りするのには主に子どもたちから若い世代であった。

ところで、この羅須地人協会という名称の意味には、いくつかの説があり、あまりはっきりしていない。伝聞では、「『羅須』は花巻町を花巻というようなもので特に意味はない」と語ったと伝えられているが、私塾とは言え、理想を追求する場所の命名に思い入れが無いはずがない。したがって、何らかの意味を込めていると筆者は考えている。羅須については、修羅の逆だとか、田舎の、あるいは質素なという意味の英語 Rusticから採ったのではないかとされているが、本当のところはよくわからない。ただ、地人という言葉の方は、単純に大地に根を張る人という意味での地人ではなく、天地人に由来するのではないかと、とも思える。天地人は、孟子の「天時不如地利 地利不如人和」という言葉に由来している。もともとは戦などで天は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず、という意味で、人の和が最も大切であると言うことを説いている。干ばつや自然災害を天とすれば、それを土壌改良や肥料設計でなんとかする「地の利」を生かし、なおかつ協会に集う若者農民のネットワーク、つまり「人の和」によって、農業を振興したいという賢治の思いの表れなのではないだろうか。では、なぜ天地人という言葉を使わなかったのか、という疑問が生じる。星好きな賢治が天を入れなかったのは、「天地人」のままではあんまりなので、天を羅須に換えたのではないかと、とも思えるが、その場合でも、羅須の意味が天なのかどうか、やはりわからない。謎に満ちた名称は、あまり使われず、実際に出入りした青年たちも「農民芸術学校」と称していたらしい。

（※1）現在の岩手県立花巻農業高等学校（旧花巻農学校）に賢治の住居である羅須地人協会の建物が移設されているが、玄関脇に掛かる小さな黒板には「下ノ畑ニ居リマス」というチョークの文字が残る。当時の賢治の日常を象徴している。

（※2）大正14年に詩人草野心平が創刊した詩誌。八木重吉や賢治らの詩を紹介した。「賢治、大地へ（3）」参照